





目次	
「空き家」の幸福の哲学 長谷川祐子	11
導きのキュレーション 川勝真一	17
イクヤマ家	30
道念邦子 Kuniko Donen	32
清水冴 Sae Shimizu	38
佐藤弘隆 Hirotaka Sato	44
お向かいの家	50
佐藤弘隆 Hirotaka Sato	52
マーガレット・ウィブマー Margret Wibmer	66
O33 Ousansan	82
Kアパート	88
田中宏和 Hirokazu Tanaka	90
中森あかね Akane Nakamori	100
ニック・ヴァンデルギーセン Nik van der Giesen	110
角の家	116
サブドキュメント sub-document	118
松本家	126
下出和美 Kazumi Shimode	128
目印だった椅子 山本周 頼安ブルノ礼市	138
カフェ／メディエーター	140

「空き家」の幸福の哲学

長谷川祐子
キュレーター／美術批評

空き家を思考する

街と家の関係はどのようなものなのだろう。

少子高齢化に従ってこの国では都市のなかに空き家が増え続けている。都市のそのような変化と、家の変化を一緒にとらえるのが普通感覚だ。都市のなかでもさびれていくところと、発展していく場所があるように。人がいなくなった家は「家」とはもはや呼べないのかもしれない。そこは虫や植物、埃やヴァクテリアの棲家になっているとみることもできる。

「消えつつ 生まれつつ あるところ」と題された、5軒の空き家を使った本展の企画書にはこのように書かれている。
「植物には発芽し、成長し、開花を経て、種子を残し、枯死、休眠するというライフサイクルがあります。本展では菊川という土地に根ざす空き家群を枯死、休眠期の過程にある植物として想像します」

震災による喪失に呼应したという作家たちは、喪失の先にある生成を循環の流れの先に期待する。人間、家屋、コミュニティも植物のように生まれては消えていくという循環を繰り返してきた。空き家は現在の通過点であり、またそこに変化が起こる。その主旋律となっているのが菊川を流れる鞍月用水の水音である。方丈記の鴨長明との類似性は、彼が方丈のモバイル住居に住み、災厄の多い京都の中を移動したという物語である。そこにも水の流れはあるがこちらの植物の喩えはより力強く、芽吹きを期としている。

哲学者のエマヌエーレ・コッチャは、『家の哲学』でこのように述べている。
「わたしたちが街に存在するのは、つねに家を介してでしかない。わたしがかつて(中略)どこであっても住まうことができたのは、いつも寝室、台所、椅子、仕事部屋、戸棚、浴槽、空調のおかげにほかならない」(p.5)
「(住まうこととは) わたしたちが自分の幸福や呼吸と切り離せないくらいにまで濃密な関係を、事物や人々と織りなすことを意味している」(p.5)
「あらゆる家は純粋に道徳的な実在なのだ。わたしたちが家を建てるのは、世界の一部——物、人、動物、植物、大気、出来事、イメージ、思い出——を親密なやり方で迎え入れるためであり、そのことによってわたしたちの幸福そのものが可能となるのである」(p.6)

彼は労働と愛というふたつの人間の行為を市民社会の基本とし、働く自由と愛することの自由が近代が約束した本質であり、家は愛と深くかかわっていると述べる。
ここで家は誰かを、何かを受け入れる場所として語られている。このコッチャの考えは本展のありようと深く関わっている。このプロジェクトは空き家を哲学する実践といってもいい

長谷川祐子 (はせがわ・ゆうこ)

イスタンブール、サンパウロ、シャルジャ、モスクワなどの国際ビエンナーレをキュレーションし、金沢21世紀美術館や犬島「家プロジェクト」で公共性を開くローカルな美術館づくりを実現。京都大学経営管理大学院客員教授、東京藝術大学名誉教授、国際文化会館アート&デザイン・プログラムディレクター。2021-2025年は金沢21世紀美術館館長。犬島「家プロジェクト」アーティスティック・ディレクター。





イクヤマ家

昭和44年に建てられた住宅で、3年前まで高齢女性が一人で暮らしていましたが、施設への入居をきっかけに空き家となりました。現在は綴るの拠点として改修し、白いタイルが映えるキッチンで、みんなで食卓を囲める場となっています。建築当時、この土地には以前から暮らしていた人がいて、新しい家を建てた持ち主としばらくの間、同じ屋根の下で生活を共にしていたといいます。そのエピソードは、綴るが大切にしている関わりのあり方にも通じ、不思議なめぐり合わせを感じさせます。

Ikuyama House

Built in 1969, this house was home to an elderly woman who lived here alone until three years ago, when she moved into a care facility and the property fell vacant. It has since been renovated as the base for Tsuzuru, with a bright kitchen lined in white tiles that now serves as a gathering place where people can share meals around a common table.

When the house was first constructed, another family had already been living on this plot, and for a time the new owners and the former residents shared life under the same roof. That story, with its quiet sense of coincidence and continuity, echoes the ethos of Tsuzuru: an approach to living that values the bonds formed through unexpected encounters.

1944年 石川県石川郡神主町（現・白山市）生まれ、金沢市在住

Born in 1944 in Kannushi-machi, Ishikawa District (now Hakusan City),
Ishikawa Prefecture; based in Kanazawa

道念邦子は、幼少期より野の草花と親しく暮らし、身近な植物が内包するエネルギーに魅了されてきました。伝統的ないけばなの技を修めながらも、前衛的な表現への関心が高まる時代に、自身も従来の枠組みを超える創造を探求してきました。

1階の和室で展開された《エバーグリーン ネバーストップ 永遠のいま》は、庭先に植えらえた朝鮮楨の葉が「永遠に続く今」を意味することから着想を得たインスタレーションです。朝鮮楨の葉にインクを付け、床に転写することで、葉のかたちとその影が浮かび上がります。常に変化し続ける植物の痕跡を〈いま・ここ〉に刻むことで、家という空間と時間、そして私たちを結び直しました。

また、和室の壁には道念の絵画作品が展示されました。1989～90年、自らの生き方と表現の自由を求めて渡英した道念は、街を逍遙しながら野花を摘み、滞在先の花器に生けてはスケッチと図案化を重ねました。その過程で、小さな花々がまるで宇宙のように広がっていく感覚を体験したと語ります。本作は、それらの図案に色彩を与え、絵画として結実させたものです。

生涯にわたり草花と向き合ってきた道念の繊細な視点を通じ、私たちも植物の息吹を感じながら、「永遠のいま」に思いを巡らせてみたいと思います。

Since childhood, Kuniko Donen has lived closely with wild grasses and flowers, drawn to the energy they hold. While she trained in the traditional art of ikebana, she also explored forms of expression that pushed beyond conventional boundaries, in step with the growing interest in avant-garde practices of her time.

Her installation *Evergreen Never-stop: The Eternal Now*, presented in the tatami room on the first floor, was inspired by the leaves of the Japanese torreya tree planted in the garden, whose name evokes the idea of an ‘eternal present’. By inking the leaves and transferring their impressions onto the floor, the shapes and shadows of the foliage emerge. These traces of ever-changing plants inscribe the moment of ‘here / now’, renewing the connection between the house, its time and space, and ourselves.

Also shown in the tatami room were Donen’s paintings. In 1989–90, she travelled to England in search of a freer life and artistic expression. Wandering through the streets, she gathered wildflowers, arranging them in vases at her accommodation, sketching and stylising their forms again and again. She recalls how, in the process, the small flowers seemed to expand like a universe. The present work realises these designs in colour, bringing them to fruition as paintings.

Through Donen’s lifelong dialogue with plants and her finely attuned perspective, we are invited to sense their breath and reflect on the ‘eternal now’.



《エバーグリーン ネバーストップ 永遠のいま》(2024)
インスタレーション、朝鮮楨、インク
Evergreen Never-stop: The Eternal Now (2024)
installation, Korean plum yew leaves, ink





《星を重ねる。2人で星座を結ぶ。じきに私はいなくなる。》(2024)
星空のような模様をした土壁、マスキングテープ
Overlapping stars. Connecting constellations together. Soon I will be gone. (2024)
Mud wall with a starry pattern, masking tape

アーティスト・インタビュー

田中さんは、これまでも空間を一つの要素として作品を展開されてきましたが、主にホワイトキューブでの展示が中心だったかと思います。今回、アパートの空き部屋での制作をどのように振り返りますか？

田中 今回の取り組みで1つははっきりしたことがあります。それは、私は今まで展示空間に元々あった物や展示空間それ自体を尊重すべき「あなた」と捉えていたことです。これは物や空間を単なる道具としてではなく、私と対等の存在として認め、関わるというケアに通底する態度だと思います。振り返れば、今まで作品によって強弱はあったものの、今回のような展示空間であれホワイトキューブであれ、この態度は常にありました。その点では、空き家もホワイトキューブも私にとっては大きな差はないでしょう。また、空き家は昔に誰かが住んでいたからなのか、そこにある全てのものが何かしら意思を持って私に語りかけてくるような感覚がありました。それによってこの気付きを得られたのだと思います。そういった意味では、空き家は私たちがその場と共にあること、ひいては現代における「共生」のあり方を考える場になり得ます。

田中さんの4号室への眼差しが、とにかく優しいと感じましたが、その背景には田中さんの実践のコアとなる「ケア」の概念がありますね。田中さんは「ケア」をどのように捉えていますか。

田中 難しい質問ですね。ケアという概念、結局何が人間や事物に対してケアになるのか…まだ上手く言語化できているわけではありません。ただ、ひとつ思うのは、ケアは道徳的な関係性ではなく倫理的な関係性であるということです。つまり、こういう関係を結べばケアになるからそうするべき、と言い切れるものではなく、目の前の相手の反応を伺いながらその都度どう関係を結んでいくかを考えていくことがケアにおいて必要なのだと思います。そういった意味ではケアを上手く言葉にできないのは自然なことなのかもしれません。また、ケアの対象が人間であれば反応は伺いやすいですが、空き家などの事物からは反応を伺うことが極めて難しい、というよりほぼ不可能に近いです。だからこそ、どのように倫理的な応答をするのが重要になりますし、そこにケアの本質が現れるような気もしています。今回の展示でもそこがとても難しかったですし、完璧な答えを出せたとも思いません。声を持たない事物とどういった倫理的关系を結ぶことができるのか、これからも探求は続いています。

うつ病の当事者でもある田中さんは、アーティストとして、どのように「ケア」と芸術実践を結びつけようとしているのですか？

田中 うつ病の経験に寄せた「人間にとってのケア」について語ろうと思います。こちらには割と明確な答えがあります。僕は「人間にとってケアすること、されること」＝「交感神



p. 130

上:《風景観察 (蛙、亀、犬)》
(2022) 45.5×53cm キャンバスに油絵具
Top left: *Landscape Observation (Frog, Turtle, Dog)* (2022) 45.5×53cm, Oil on canvas

下:《不定な雲を見る (犬、亀、リス)》
(2024) 24.2×33.3cm キャンバスに油絵具
Bottom left: *Looking at Uncertain Clouds (Dog, Turtle, Squirrel)* (2024) 24.2×33.3cm, Oil on canvas

p. 131
上:《世界はつながっていた (ネズミと石とカメ)》
(2023) 25.7×20cm 紙に色鉛筆
Top right: *The World Was Connected (Mouse, Stone, Turtle)* (2023) 25.7×20cm, Coloured pencil on paper

下:《風景観察 (モルモット)》
(2024) 41×31.8cm キャンバスに油絵具
Bottom right: *Landscape Observation (Guinea Pig)* (2024) 41×31.8cm, Oil on canvas